雑司ヶ谷研究 5

――近隣交流を促す境界領域――

Zoshigaya Study 5
—The Boundaries of Detached Houses for Better Communication—

住居学科　泉水　花奈子　薬袋　奈美子
Dept. of Housing and Architecture　Hanako Sensui　Namiko Minai

抄　録　住宅と道の間にある領域“境界領域”は，密集市街地にあるような住宅にとっては貴重な生活空間の一部であり，通りへ向けて出される鉢植えや縁台等は近隣との交流のきっかけにもなり得る。本稿では，雑司が谷の一戸建て住宅を対象にしたアンケート調査の結果を中心に，住民たちが普段の生活の中でどのように境界領域を利用し，それが近隣とのつながりにどう影響しているのかを整理した。その結果，雑司が谷の住民の多くは境界領域において緑を育てたり，食事や趣味を楽しんだりと，生活の様々な場面で境界領域を有効的に活用しており，日常的に隣近所と挨拶や会話を交わしていることが確認できたが，同時に駐車場の位置によっては日常的な近隣との交流が妨げられていることも確認できた。

キーワード：境界領域，近隣交流，表出，縁台，密集市街地

Abstract　The “boundary space” between a house and the street is a precious living space for residents living in densely built-up areas. Potted plants and benches displayed on the street would create chances for neighborhood communication. This paper surveys how residents are using the boundary space, and how it influences neighborhood relationship. This study is based on questionnaires given to residents. We found that many residents are using the boundary space where they enjoy gardening, cooking, and hobbies etc., and many residents greet and talk with their neighbors on a daily basis. We also found that some parking space plans may hinder neighborhood relationships.

Keywords : boundary space, neighborhood relationships, display, benches densely built-up areas

1. はじめに

1.1. 背景と目的

本稿は生活の息遣い豊かな雑司ヶ谷の住空間を様々な角度から分析しようという雑司ヶ谷研究の第五報である。密集市街地としての雑司ヶ谷の現状を整理した上で，雑司ヶ谷の住民が家の前の通りや路地を含めた境界領域を普段どのように利用し，それが近隣とのつながりにどう影響しているのかを，駐車場との位置関係も含めて明らかにし，雑司ヶ谷の今後のまちづくりにおける基礎的研究となることを目的としている。

密集市街地のような道が狭く建物同士が近接する地域では，住民の生活の気配を間近に感じられ，普段から家の前で住民同士が立ち話をする姿があったり，通りに向けて鉢植えや縁台を置く家が多く見られたりと，家の前の通りや路地が生活空間の一部であり，かつ，近隣とのつながりの場となっている。

しかし，密集市街地では防災や緊急車両の通行のために画一的な道路拡幅事業が進められてきた。拡幅された道路では，狭隘道路に見られるようなコミュニケーションの機会が減っているように感じる場所もある。本稿では，現在の雑司ヶ谷で感じられる路地的な魅力を，境界領域の使い方を分析するこ

とから探ることを試み，新しい密集市街地整備の方向性を検討する基礎的知見を得るものである。

1.2. 境界領域について

本稿では，「境界領域」という言葉を使い，図 1 で示すように，住宅とそれが接道する道との間にある私的領域と，その道に広がる私的利用され領域を示すこととする。これまでにこういった空間の研究は，次項に示すように，置かれた物（あふれだしや表出等）を対象としていることが多いが，本稿では，住宅の建て方や塀の様子等も含めて一まとまりの空間として考えたい。そのために“境界領域”という言葉を使うこととした。

そのため「境界領域の設え」とは，境界領域における表出や塀の有無，壁面後退距離や接道側開口部の有無・大きさを示している。なお，ここで言う「表出」とは，境界領域に出された鉢植え等の緑を示している。

1.3. 既往研究

本稿で境界領域として扱っている通りや路地等の外部空間の私的利用や，そこでの近隣同士のコミュニケーションについての過去の論文を見ていくと，外部空間の私的利用に関する研究として，青木義次らの“開放的路地空間での領域化としてのあふれ出し　路地空間へのあふれ出し調査からみた計画概念の仮説と検証　その 1”が挙げられる。ここで筆者らは領域化しにくい開放的空間であっても居住者によって領域化するために私的利用がなされるとし，

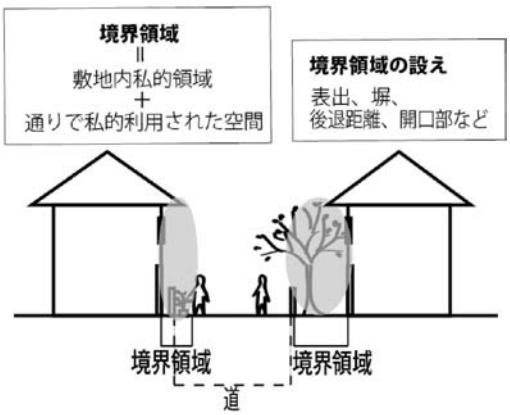


図 1　境界領域　模式図

さらにこの主張は，住民は与えられた環境に対して能動的に働きかけてくる存在とする見方を強調するものであるとしている。また，密集市街地における路地的空間での行動とコミュニケーションに関する研究としては，金栄奭らの“密集住宅地の「住戸群」における路地と隙間の役割に関する研究”が挙げられ，住宅地に路地や隙間があることで誘発されるコミュニケーションがあり，視線が通る路地や隙間に，洗濯物や作業などのために出ていられる小さな自分の場所を持つことは，近隣とのコミュニケーションを助ける，としている。

他にも，密集市街地の路地や家の外部空間の利用に関する研究には多くの蓄積があるが，取り上げられる対象地が車の通れない住宅地であることが多いため，駐車場の位置関係と外部空間の利用の関係性にまで触れている研究はあまり見られない。

2. 防災面から見る雑司ヶ谷の位置づけ

2.1. 密集市街地としての雑司ヶ谷

豊島区雑司が谷は，平成 9 年より東京都の防災都市づくり推進計画＊1 における重点整備地域（5：東池袋地区に含まれる）に指定されており，さらに 2 丁目は，平成 12 年より国が指定する東京の重点密集市街地＊2 にも指定されている。

ちなみに，豊島区は区の面積に占める重点密集市街地の面積の割合が 23 区中 4 番目に高くなっている。

2.2. 雑司ヶ谷の木密度

表 2 は平成 22 年 3 月の東京都消防庁による市街地状況調査報告第 8 回をもと算出した豊島区町丁別木造密度の上位 10 町丁である。雑司が谷 1 ～ 3 丁目は上位 10 位以内に 3 つとも入っており，特に雑司が谷 1 丁目は豊島区内では木造密度が一番高くなっている。

以上のように，豊島区雑司が谷は防災面において全国的に見ても整備が急がれる地域である。しかし，平成 24 年度に東京都が定めた木密地域不燃化 10 年プロジェクトにおける豊島区の先行実施地区には東池袋 4・5 丁目が選ばれたため，豊島区においては東池袋地区の整備が先行しており，雑司ヶ谷地域の整備は依然として遅れているのが現状である。旧高田小学校跡地や環状 5 号線に関連した公的な空間についての整備が進められる以外は，暫く

は，行政による強いリーダーシップに基づく整備は行われない。そのため，住民による住宅の個別更新等が中心になって，まちが変わっていくと考えられる地域である。

表 1　区の面積に占める重点密集市街地の割合

		区の面積 (km^2)	重密の面積 (km^2)	重密面積の割合
1	荒　川　区	10.20	1.54	**15.1%**
2	墨　田　区	13.75	1.79	**13.0%**
3	目　黒　区	14.70	1.75	**11.9%**
4	豊　島　区	13.01	1.52	**11.7%**
5	品　川　区	22.72	2.52	**11.1%**

表 2　豊島区町丁目別木造密度上位 10 位

	町丁目	木造棟数	面積 (km^2)	木造密度
1	雑司が谷 1	97	0.184	527.2
2	高松 2	86	0.175	491.4
3	雑司が谷 2	60	0.128	468.8
4	千早 3	68	0.157	433.1
5	千早 2	73	0.192	380.2
6	雑司が谷 3	33	0.091	362.6
7	南長崎 6	46	0.132	348.5
8	高田 1	58	0.171	339.2
9	南長崎 3	48	0.146	328.8
10	西巣鴨 4	31	0.102	303.9

3. 調査概要

3.1. 調査対象・調査方法

本研究の調査対象は，住所が雑司が谷 1 ～ 3 丁目の一戸建て住宅*3 とした。以下，雑司ヶ谷の“ヶ”の表記は住所表記の“が”とする*4。

目視により住宅と道の境界領域における設えを調査し，アンケートにより境界領域の利用実態とそこでの近隣交流について調査した。

住宅と駐車場の位置関係については目視による境界領域の設え調査の際に確認した。

アンケートはポスティングによる配布と郵送回収にて行い，配布数 1,296 件中 43.3%から回答を得られた。

表 3　調査概要

	境界領域調査の概要
設え調査	調査方法：目視調査 調査期間：2012 年　8 月 17 日～ 10 月 2 日 11 月 29 日～ 12 月 10 日
利用実態調査	調査方法：アンケート調査 （ポスティング配布と郵送回収） ・配布数：1296 件 ・回答数：563 件（回答率：43.3%） 配布期間：2012 年　11 月 14 日～ 24 日

3.2. 研究方法

本研究では，まず，木造密集市街地としての雑司が谷の位置づけを整理し，その上で境界領域の設え調査と利用実態調査の結果をもとに，雑司が谷の一戸建て住宅における境界領域の利用実態と，近隣交流との関係について考察する。

3.3. 基本属性

図 2 はアンケート回答者の基本属性である。本調査では居住歴 10 年未満の新住民の方から 70 年以上と長年居住している人まで幅広い居住歴の方から回答を得られた。築年数は，10 年未満の新しい家の回答者が 2 割を占めている一方，築 60 年以上の戦前からあるような家も 1 割近く残っている。回答者の年齢は 60 代以上が半数を占めており，高齢者の多い地域であることがわかる。

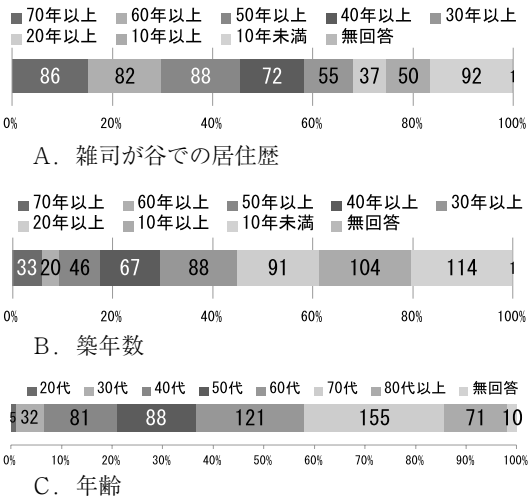


図 2　アンケート回答者の基本属性

4. 家を建てる・選ぶ際に重視した点

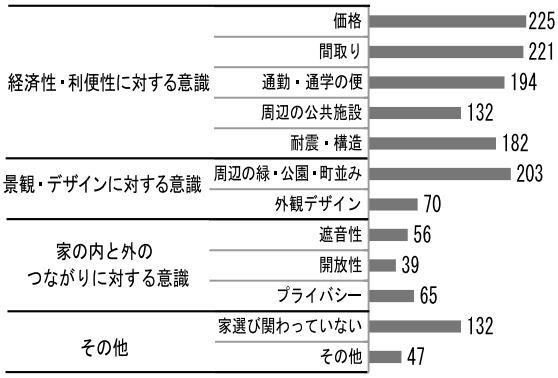
図 3 は，「家を建てる，もしくは選ぶ際，何を重視しましたか」という問いに対する複数選択の回答である。多くの人が経済性や利便性に対する意識から家を選択しており，家の内と外のつながり，特に開放性に関しては，家の選択時にあまり意識されていないことが確認できる。さらに景観・デザインに対する意識を見ると，雑司が谷の住民達は周辺の緑や街並み等が気に入りここに住んでいることが読み取れる。

一方，図 4 は前述の問いで“開放性”もしくは“プライバシー”を選択した人に，さらに「“開放性”または“プライバシー”のために重視したものは何ですか」という問いに対する複数選択の回答である。開放性とプライバシーを選択した人の中には，外からの視線を気にした意見が多い一方で，家の前の通りや景色を見えるようにしたり，人を招きやすくしたりと，外とのつながりを求める意見もあることが確認できた。

また，表 4 は居間から自宅前の通り・路地が見えると回答した人に対して，「居間で過ごしている時に通りを歩くご近所の方と挨拶・会話をすることがありますか」と伺った結果である。居間から日常的に挨拶・会話をする家が 3 割近くあり，まれにある家と合わせると半数以上が居間から挨拶や会話を交わしていることが確認できた。

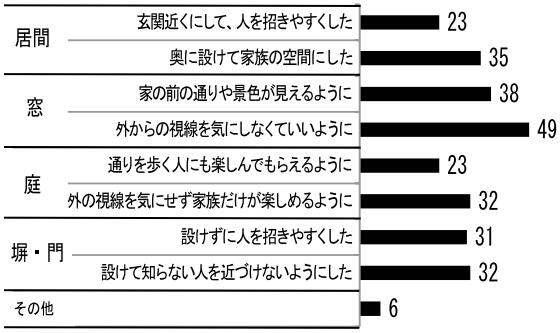
なお，居間での挨拶や会話が「日常的によくある」「まれにある」と回答した人は 169 人であるが，そのうちの 153 人（90.5%）は，前述の「家を建てる，もしくは選ぶ際，何を重視しましたか」という問いで“開放性”という選択肢を選んでいない。

これは，多くの住民が家を選択する際にはどうしても経済性や利便性等に意識が向きがちではあるが，実際に住み，生活を始めると，家の外とのつながりを多く持つようになるということではないだろうか。



n=563［複数回答可］（単位：件数）

図 3　家を建てる・選ぶ際に重視した点



n=99［複数回答可］（単位：件数）

図 4　開放性・プライバシーで重視した点

5. 境界領域の利用実態

5.1. 緑を育てている場所

回答者が境界領域の中で緑を育てる場所の件数とその割合を表 5 に示す。6 割以上が玄関前で，半数以上が庭で緑を育てており，密集市街地である雑司が谷では玄関前で緑を育てる家が多いことが確認できた。また，2 割以上の家が自宅前の通りや 2F ベランダ，居間の窓辺などでも緑を育てていることから，雑司が谷の住人が限られた敷地の中でも緑を楽しんでいることが読み取れる。

5.2. 家事行為をする場所

回答者が境界領域の中で家事行為（緑の世話を除く）をする場所の件数とその割合を表 6 に示す。家事行為にはベランダや庭が多く使われていることが

表 4　居間での挨拶・会話　n=313

	日常的に よくある	まれにある	子供が小さい時 よくあった	退職後 するようになった	全くない	その他
件数	90	79	8	0	133	5
割合	28.8%	25.2%	2.6%	0.0%	42.5%	1.6%

表 5　緑を育てる場所［複数回答可］n=563

	自宅前 通り・路地	玄関前	駐車場	庭	1F ベランダ	2F ベランダ	3F ベランダ	居間の 窓辺	屋上	その他	なし
件数	119	341	60	302	19	142	46	119	32	19	30
割合	21.1%	60.6%	10.7%	53.6%	3.4%	25.2%	8.2%	21.1%	5.7%	3.4%	5.3%

表 6　家事行為をする場所［複数回答可］n=563

	自宅前 通り・路地	玄関前	駐車場	庭	1F ベランダ	2F ベランダ	3F ベランダ	居間の 窓辺	屋上	その他	なし
件数	24	52	27	90	70	225	66	54	42	20	75
割合	4.3%	9.2%	4.8%	16.0%	12.4%	40.0%	11.7%	9.6%	7.5%	3.6%	13.3%

表 7　掃除や落ち葉かきをする場所［複数回答可］n=563

	自宅前 通り・路地	玄関前	駐車場	庭	1F ベランダ	2F ベランダ	3F ベランダ	居間の 窓辺	屋上	その他	なし
件数	386	431	142	276	26	124	59	47	36	17	27
割合	68.6%	76.6%	25.2%	49.0%	4.6%	22.0%	10.5%	8.3%	6.4%	3.0%	4.8%

確認できた。

5.3. 掃除や落ち葉かきをする場所

回答者が境界領域の中で掃除や落ち葉かきをする場所の件数とその割合を表 7 に示す。玄関前で 7 割以上，自宅前の通り・路地で 6 割以上の家が掃除や落ち葉かきをしており，雑司が谷では自宅前の通りや路地までもが生活空間の一部になっていることが読み取れる。

6. 境界領域の利用と近隣交流

前章で，緑を育てる場所，家事行為をする場所，掃除や落ち葉かきをする場所として多く挙げられたものについて，そこでの近隣との交流を見ていく。

表 8 は，緑を育てる場所として多く挙げられた玄関前と庭で，隣近所と挨拶や会話をする家を，緑を育てている家とそうでない家に分けて，それぞれの全体数に占める割合で示したものである。玄関前と庭のどちらにおいても緑を育てている家の方が近隣と挨拶や会話を交わしている家が多いことがわかる。

表 9 は，家事行為をする場所として多く挙げられた 2F ベランダと庭で，隣近所と挨拶や会話をする家を，家事行為をする家とそうでない家に分けて，それぞれの全体数に占める割合で示したものである。こちらは，庭では家事をするかどうかで交流にあまり違いはないものの，2F ベランダについては，そこで家事行為をする家の方が圧倒的に隣近所との

表 8　緑と近隣交流

	玄関前で		庭で	
該当件数	緑を育てる n=223	緑を育てない n=111	緑を育てる n=284	緑を育てない n=44
近隣住民と挨拶や会話をすると回答した割合	65.4%	50.0%	27.5%	9.1%

表 9　家事行為と近隣交流

	2F ベランダで		庭で	
該当件数	家事をする n=226	家事をしない n=322	家事をする n=84	家事をしない n=246
近隣住民と挨拶や会話をすると回答した割合	26.5%	9.9%	28.6%	24.0%

表 10　掃除・落ち葉かきと近隣交流

	玄関前で		通り・路地で	
該当件数	掃除をする n=430	掃除をしない n=134	掃除をする n=386	掃除をしない n=178
近隣住民と挨拶や会話をすると回答した割合	67.4%	40.3%	88.6%	66.3%

交流が多いことがわかる。

表 10 は，掃除や落ち葉かきをする場所として多く挙げられた玄関前と通り・路地で，隣近所と挨拶や会話をする家を，掃除や落ち葉かきをする家とそうでない家に分けて，それぞれの全体数に占める割合で示したものである。玄関前と通り・路地のどちらにおいても，掃除や落ち葉かきをする家の方が隣近所と交流する家が多いことが確認出来る。

以上から，緑の世話や家事作業，掃除など普段の生活の中で境界領域へ出る機会が多いとそれだけ隣近所との挨拶や会話も多くなることが確認できた。家を設計する際に境界領域を生活空間の一部として利用できるように配慮することがコミュニティ形成につながるということではないだろうか。

7. 縁台や椅子を出す場所とその使い道

本調査では，境界領域に出される縁台や椅子についてもアンケートにより調査している。その結果，縁台や椅子を境界領域に常設または持出しする家は全体数 563 件中 198 件あり，実に全体の 35.2％が境界領域に椅子や縁台を出していることが確認できた。

表 11 は，その縁台や椅子を出す場所の割合を示したものである。庭や玄関前，2F ベランダへ出される割合が高いことが確認出来る。表 12 は，それら境界領域に出された縁台や椅子の使い道を示しており，198 件中 3 割以上が緑の世話をする時や外を眺める時に使っている。さらに，表 12 で 28.8％を占める「その他」の回答を示した表 13 を見ると，のんびりくつろいだり，趣味を楽しんだり，食事やパーティーをしている家もあり，縁台や椅子を出して境界領域で様々な過ごし方をしているのがわかる。さらに，家族や個人で使う他に，近所の方やお年寄りのために縁台や椅子を出している家が複数あることも確認できた。

8. 駐車場の位置と近隣交流

目視による境界領域の設え調査より，駐車場のある家において，駐車場と家の位置関係を表 14 のように 5 つに分類した。「1F」とは，住宅の 1F 部分が全て駐車場になっており，1F 部分に居住空間がないと思われるものである。「玄関前」とは，玄関よりも手前に駐車場があるもので，住宅の 1F 部分に入り込んでいるものも見られた。「玄関横」とは，

表 11　縁台・椅子の常設・持出場所［複数回答可］n=198

	玄関前 通り・路地	玄関前	駐車場	庭	1F ベランダ	2F ベランダ	3F ベランダ	居間の 窓辺	屋上	その他
常設	2.0%	6.6%	4.5%	15.7%	6.6%	15.2%	3.0%	7.1%	5.1%	2.0%
持出	8.6%	24.7%	9.6%	25.3%	4.5%	17.2%	7.6%	6.1%	12.6%	1.5%

表 12　縁台・椅子の使い道［複数回答可］n=198

	緑の世話をする時	外を眺める時	洗濯する時	遊ぶ時	友人とお喋りする時	その他
件数	74	73	31	25	20	57
割合	37.4%	36.9%	15.7%	12.6%	10.1%	28.8%

表 13　縁台・椅子の使い道「その他」回答集

■食事，中庭で七輪を囲んで食事，BBQ，たまに焼肉

■茶会，ワインパーティー

■外来者と近所の方に使ってもらう，ご近所の方のため，ご高齢の休憩どころに，通りを歩く人が座る，

■植木屋さんに，お客様がくつろぐときに店の客用セールス・近所の方のために

■お祭り，お会式

■星空観察，読書，趣味

■くつろぐとき，日向ぼっこ，冬温まる，お休みいす，のんびり

■タバコ

■作業，扉の修理・電球交換

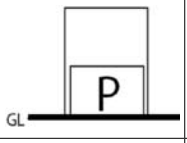
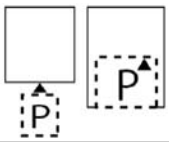
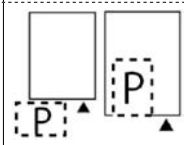
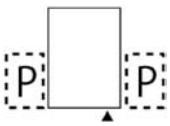
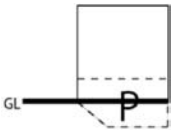
■猫と遊ぶ，犬と日向ぼっこ，ペット

■運動

■タクシー待つ時

■ほとんど使わない，インテリアで荷物置き，なんとなく

表 14　駐車場タイプ別　玄関前での日常的な挨拶・会話

該当件数	1F n=7	玄関前 n=123	玄関横 n=96	家の横 n=37	半地下 n=21
駐車場 タイプ					
玄関前で日常的に挨拶・会話をする家	28.6%	35.8%	47.9%	56.8%	57.1%

玄関に並ぶような形で駐車場があるもので，こちらも住宅の 1F 部分に入り込んでいるものも見られた。「家の横」とは，玄関付近ではなく，家の隣に駐車場を設けているものであり，「半地下」とは，住宅の下に潜り込むような形で駐車場が設けられているものである。

以上の分類の結果，雑司が谷には玄関手前に駐車場を設ける家が 4 割以上，玄関のすぐ横に設ける家が 3 割以上あることが確認できた。表 14 は駐車場タイプ別にみる，玄関前で近隣と日常的に挨拶・会話をする家の割合を示したものである。家の 1F 部分や玄関の目の前に駐車場があると，日常的な挨拶・会話が少ないことがわかる。一方，駐車場が家の横や半地下にある場合は，半数以上が玄関前で日常的に挨拶・会話を交わしており，以上から駐車場と住まいの位置関係は近隣とのつながりに少なからず影響を与えていると言える。

前述の通り密集市街地である雑司が谷では玄関前・玄関横に駐車場を設ける家が多い。しかし，前章までに示したように，雑司が谷の住民は普段の生活において玄関前を含めた境界領域を様々な目的で利用しており，またそれが近隣との交流にもつながってしている。そのような役割をもった境界領域の大半を駐車場に取られてしまうのは惜しいことではないだろうか。特に，密集市街地である雑司が谷のような限られた敷地では，境界領域における駐車場の位置関係に配慮することが望まれる。

9. おわりに

本研究では，雑司が谷の一戸建て住宅に住む住民が，境界領域を普段どのように利用し，それが近隣とのつながりにどう影響しているのかを，駐車場との位置関係も含めて明らかにした。

雑司が谷の一戸建て住宅に住む住民は，図 2 より家を選択する際，開放性は特に意識していないようである。しかしその一方で居間から日常的に近隣と挨拶や会話を交わし，5 章で見たように多くの住民が生活空間の一部として境界領域を利用している。さらに，7 章より 3 割以上の家が縁台等を境界領域へ出し，暮らしの様々な場面で利用していた。そして，境界領域を生活空間の一部として利用することが隣近所とのコミュニティ形成につながりうることもわかった。つまり，家を選択する際には意識していないものの，実際に生活をしはじめると境界領域が雑司が谷の住民にとって大切な生活空間の一部でとなり，かつ，隣近所とつながる貴重な空間となっていることが確認できた。

しかし同時に，駐車場との位置関係によっては，日常的な交流が車によって妨げられていることも確認できた。

今後も駐車場付の住宅が増えることは想像に難くない。限られた敷地の中で，境界領域を有効的に活用した彼らの暮らしぶりと近隣とのつながりを維持していくためにも，今後のまちづくりや住宅更新において，境界領域への配慮を欠かさないでほしいものである。

註

＊ 1　防災都市づくり推進計画とは，東京都により平成 7 年度に策定（平成 15 年度，22 年度に改定）されたもので，阪神・淡路大震災の教訓を踏まえて策定された都市防災施設基本計画（昭和 56 年 東京都）の考えを継承しつつ，より効果的，集中的に防災都市づくりを推進するために策定された。この計画には整備地域と重点整備地域の二つの指定があり，重点整備地域とは，地域危険性が高く，かつ，特に老朽化した木造建築が集積するなど，震災時の大きな被害が想定される地域（整備地域）の中から，基盤整備型事業等を重視して展開し早期に防災性の向上を図ることにより，波及効果が期待できる地域，とされている。

＊ 2　重点密集市街地とは，密集市街地のうち，延焼危険性又は避難困難性が高く，地震時等において最低限の安全性を確保することが困難である，著しく危険な密集市街地を指す。（平成 24 年 10 月の抽出基準・整備目標変更後の基準）

＊ 3　本稿における一戸建て住宅とは，2 世帯住宅，店舗併用住宅を含む，独立した 1 つの住宅で，集合住宅でないものを指す。なお，雑司が谷には長屋的な住宅も多く残っているが，本研究の目的を考えると，これを省くことは望ましくないため，長屋的なものも一戸建て住宅として考える。

＊ 4　「雑司ヶ谷」に対する表記には多種多様なものがある。筆者らがこれまでに報告してきた雑司ヶ谷研究第 1 ～ 4 報の中では雑司ヶ谷の表記は「雑司ヶ谷」としていた。雑司ヶ谷とは，かつての広大な雑司ヶ谷村を示し，歴史とともにその範囲が移り変わってきた。現在は住所表記が「雑司が谷」となっており，範囲も最大時よりはかなり縮小している。その

ため「雑司ヶ谷」というと，かつての雑司ヶ谷村の範囲まで含む意味合いとなり，この一連の研究では雑司ヶ谷の歴史的な背景も踏まえて研究することを目的としていたため，これまでは「雑司ヶ谷」という表記を使用していた。しかし，本調査では調査対象を住所が雑司が谷１～３丁目としたため，本報告の調査対象地についての表記も「雑司が谷」としている。

引用文献

1）宇杉和夫，青木　仁，移籍和朗，岡本哲志：まち路地再生のデザイン―路地に学ぶ生活空間の再生術―，彰国社（2010）

2）鈴木成文，他：「いえ」と「まち」，鹿島出版会（1984）

3）青木義次，湯浅義晴：開放的路地空間での領域化としてのあふれ出し　路地空間へのあふれ出し調査からみた計画概念の仮説と検証　その１，日本建築学会計画系論文集，**449**，47-55（1993）

4）金　栄奭，高橋鷹志：密集住宅地の「住戸群」における路地と隙間の役割に関する研究，日本建築学会計画系論文集，**469**，87-96（1995）

5）皆川智子，薬袋奈美子：雑司ヶ谷研究　その１―道路の構成と住宅更新―，日女大紀要（家政），**58**，（2011）

6）薬袋奈美子，田村有希，泉水花奈子：雑司ヶ谷研究３―「緑のこみちの会」の活動と参加住民の意識―，日女大紀要（家政），**60**，（2013）

7）豊島区 HP（http://www.city.toshima.lg.jp/）

10）防災都市づくり推進計画「燃えない」「壊れない」震災に強い都市の実現を目指して，東京都（2010）

11）国土交通省 HP
・「地震時等において大規模な火災の危険性があり重点的に改善すべき密集市街地」について（http://www.mlit.go.jp/kisha/kisha03/07/070711_.html）（2003）
・「地震時等に著しく危険な密集市街地」について（http://www.mlit.go.jp/report/press/house06_hh_000102.html）

12）東京都消防庁，市街地状況調査報告第８回（2010）

13）「木密地域不燃化10年プロジェクト」実施方針，東京都（2012）